

昔話に見る「食」

難波 美和子

「食べる」ことは、生命の維持にもっとも重要である。食糧生産が不安定であった時代、庶民にとっては四季を通じて持続的に食料を手に入れること、そのために保管することが、日常の関心の多くを占めていた。そのことは歴史的資料から知られるだけでなく、比較的近年の生活調査からも窺われる。食糧生産の場としての農山漁村には、山野海川の食べられる物とその利用法の膨大な知識が伝承され、天候不順などで食物が不足する惧れに備えていた。科学技術の裏付けによる生産性の増大と安定に伴って、現在ではその多くは忘れられつつあるが、各地で詳細な記録に残されたり、技術が伝承が試みられたりしている。このような記録は、過去の人々が飢えを回避するためにどれほどの努力を払ってきたかを証しするものであり、このような知識を失ってしまうことは、持続可能な生活スタイルの模索の上でも惜しまれるものである。

昔話は人生に対処する知恵を伝える側面を持つが、技術的な知識の直接的な伝承を行うものではない。昔話の中に食料確保に関する情報を求めることは間違っている。しかし、その中には、食べることに對する人々の欲求が表出しているとも考えられるのである。昔話には、食べ物を粗末に扱うことへのいましめ、分かち合うことの重要性を教えているものがある。またよい行いの結果として、よりよい食物が約束されることも、広く伝承されている。

「雀孝行」として知られる話では、「雀と燕はキョウダイだったが、親の病気に雀は仕事着のまま駆けつけて死に目に会えたが、燕はきれいに化粧し、よそ行き着に着替えて来たため、遅くなった。親は雀には孝行者だから米を食べてよい、燕には虫を食べよ、と遺言した。だから雀は米を食べるが、燕は空を飛びながら虫を捕まえないといけない」¹。「米」という食品をきわめて重視する文化の中で、善行の褒美として米を食べることが語られると同時に、雀という、米作農家にとっての害鳥に対して寛大さを求める説話になっている。

善行への褒賞としての豊かな食料は、「腰折れ雀」で、「怪我をした雀を手当てし

た貧しい老女（または夫婦）が、雀がもたらした瓢箪の種を育て、成った瓢箪の中から米があふれ出る」という説話にも見ることが出来る²。

昔話の中の食に関わる語りには、過去の人々の、飢えに対する怖れと、豊かな実りに対する感謝が現れているとあってよいだろう。だからこそ、少ない食物も分かち合うことが大切なのだった。

1 「ハレ」の食、「ケ」の食

日常の暮らしが連続する時間、場、空間を「ケ（褻）」といい、これを区切る儀礼や祝い事（不祝儀もふくむ）が行われる時間、場、空間を「ハレ（晴）」という。一年の暦において、正月を筆頭とする諸節句はハレの時であり、その際に儀礼が行われる場所は、ハレの空間となる。ハレの時空間においては、特別な言葉、振る舞いがあり、特定の装飾が場を聖別する。そして指定された食物が用意される。正月には言祝ぎが行われ、鏡餅、松飾が飾られ、「お節」料理が並ぶ。共同体によって、定められた飾りや食べ物、振る舞いは異なるが、これらは、目に見えない時間に目に見える形を与え、身体で経験する作法である。

日常の連続性を断ち切る場が「ハレ」であるから、必ずしも定められた暦上の諸行事や、共同体的な人生儀礼のみが「ハレ」というわけではない。花見などの行楽はもちろん、入学試験もまた「ハレ」の時空間と言えるだろう。花見弁当には、地域によっては「桜鯛」「ちらし寿司」が付きものであったり、入学試験には験かつぎの食物を用意する家庭もあろう。「ハレ」の食物には、珍しさよりも、子孫繁栄を願う「数の子」、健康を願う「黒豆」に見られるように、場や時を祝う心持と、さまざまな願いが込められているのである。

昔話は、多くは日常的な場が語られており、それに応じて登場する食物も、「ケ」の食とすることができる。しかし、本格昔話の中には、主人公が「非日常」の時空間に迷い込むことで、「ケ」が「ハレ」の場に一転してしまうことがある。「鼠浄土」という異界に投げ込まれたいつもの野良仕事の弁当の握り飯（または団子）は、突如としてネズミたちの「ハレ」の食へと転換し、主人公に代価としての宝をもたらす。一方、嫁の実家に挨拶に行った婿にふるまわれるのは定まった「ハレ」の食であろう。「大歳客」へのもてなしは、「ハレ」の食であるはずだが、貧しい主人公は、定められた「ハレ」の食を用意することができない。だが、心から用意された食事は、「大歳」にふさわしいものとして認められる。いずれも「ハレ」の食といっても、特

別なものではなく、その特異な時空間においてのみ、「ハレ」としての意味を持つのである。

2 何を食べるか——飢えへの恐れ

飢えに対する恐れは、限りある食料をどれだけ次の収穫期まで食い延ばせるか、という計画性を要求し、より少なく食べることが望ましい。しかし、誰も食べずにはすまずことはできないから、分かち合わねばならない。それを嫌がって、とんでもない事態に直面するのが、「食わず女房」の男である。

けちな男が、「何も食わない女がいたら女房にしよう」という。すると、美しい女が、「私は何も食べませんから」といってやってきたので妻にした。この女は、確かに何も食べずによく働いた。しかし、不思議に米の減り方が早い。そこで、「遠出する」と言っておいて、こっそり自宅の梁の上に上った。男がいなくなると、女は1斗の飯を炊き、大きな握り飯を作ると、髪を解き、頭のでっぺんにある口にどんどん投げ込んで、あっという間に1斗の飯を食べてしまった。女の正体を知った男は、そ知らぬふりで帰宅し、「合わないようだから帰ってくれ」と女に言った。女は、「かたみに大樽をくれ」と言った。男が与えると、その中に男を放り込み、蓋をすと担いでいった。山の中で、男は蓋を開け、木の枝に飛び移って逃れたが、やがて気づき、クモの正体を現した女に追いかけられる。男はどうか逃れ、命は助かった。³

男は、ひとに「何も食べない」ことを要求したがために、自分が食べられる事態を引き起こすのである。この話は欲深をいさめる一方で、「食わず女房」が大量の飯を平らげる場面に、少しの食でより多く働くことを求められた人々の、強い願望を見ることができるのではなかろうか。

けちな男のもとへやってくる「食わず女房」が「魚女房」となっている異型が、熊本で採集されている。「魚女房」は報恩譚であることが多いのだが、ここでも「どこからともなくやって来た妻は、毎日、素晴らしく美味な味噌汁を作る。それは実は魚の姿になって、すり鉢の中でだしを取っていた。夫は気味が悪くなって妻に出て行くように言う」のである。魚女房は、無限によい食事を提供し続けるのだから、極めて望ましいのだが、同時に語り手の、そのようなことはあり得ない、無限の食物への警戒という意識が、魚女房のけなげな恩返しを、けちな男への返報に変えてしまったように見える。

このように、大食の願望は、飢えの備えのために抑圧されるべきものだった。しかも、食べることが制限される食物もあった。「米」である。「米」はもっとも望ましい食物であるがゆえに、逆にもっとも食べてはいけない食物でもあった。近世までに完成した「日本」の稲作文化圏においては、稲作が可能であろうとなかろうと、米の社会的評価が極めて高く、米を食べることは地位や豊かさ、そしてその食事の威信の高さを意味した。前述した「雀孝行」における雀が米を食べることの容認や、「腰折れ雀」の瓢箪からあふれる米によってあらわされる豊かさは、この米の威信によって説明されよう。米はおいしく、食べたい食物であるとともに、稲作技術の限界によって、決して誰でもが十分に食べられる食物ではなく、なるべく食べないようにしなければならなかった。古来、多くの「雑穀」が栽培され、むしろ「雑穀」こそが主要なエネルギー源だったと考えられている。粟や稗、豆類、さらには多大な手間をかけてあく抜きした栃の実などが、重要な日常の食だった⁴。こうした背景がうかがえる昔話を、しばしば「継子譚」の中に見ることが出来る。

「継子の栗拾い」または「椎拾い」は、母親が継子に穴の開いた袋を、実子によい袋を持たせて栗や椎を拾いに山へやるが、継子は袋がいつまでたっても一杯にならないので帰れず、山で夜を明かすというモチーフによって特徴付けられる。栗も椎も、拾いに行かされるのは、それが食料だからである。そして、このような採集作業が、子どもたちの仕事だったことも反映している。この話型は冒頭モチーフとして機能し、継子が地蔵に助けられる「地蔵浄土」という話型を導くことがしばしばある。阿蘇地域で採集された類話のひとつでは、「地蔵が継子に米と栗の飯を出してくれ、継子は地蔵に米の飯を供え、自分は栗の飯を食べる。地蔵堂に賭博をする鬼がやってくるが、継子は地蔵に教えられて隠れ、鶏の鳴きまねで鬼を追い、鬼が驚いて残っていた金を手に入れる。これをまねした実子は、地蔵には栗の飯を供え、自分は米の飯を食べる。同様にやって来た鬼を鶏の鳴きまねで追い払おうとするが、笑ってしまって、正体がばれて鬼に食べられてしまう。」ここからも、食べたい食物であるが食べるべきではない米という表現が浮かび上がってくる。

同様のことは、日本の継子譚を代表する話型とみなされる「米福栗福」にも現れている。ここでも継子は栗を、実子は米を食べることになる。「米埋め栗埋め」は、「実子は米の中に寝かせ、継子は栗の中に寝かせたために、実子が寒さで死んでしまった」という応報譚になる。米と小豆の対比で、米を食べていた実子は力が弱く、小豆を食べさせられていた継子が強くなり、父親の跡目争いの相撲に勝つという類話

が、継子譚には見られる。これらの事例において、米は常に、威信が高く、おいしいものだが、粟や稗、豆などの雑穀を食べる方が望ましいとされている。米は庶民には日常的な食物ではなく、雑穀の方が健康によい、労働向きであるという言説によって、食べることがさまざまに諫められるものだったのである。それは、経験的知識というよりも、近世社会では、米が年貢として収奪されるものだったため、生産の場においても米の消費を抑える必要があったためと考えられる。

3 「食」をめぐる笑い

食べることに威信が伴う「米」という食物は、したがって、「ハレ」の場と結びついている。特に、「米」を更に加工した「(米粉の) 団子」やもち米を加工する「餅」は強く「ハレ」の食物だった。だからこそ、「愚か婿譚」の婿たちは、団子や餅を知らず、同様に手間のかかる食物であるそうめんを知らない、ということもできよう。

嫁の実家に婿が出かけた。すると「だご」を食べさせた。おいしかったので、名を聞き、忘れないようにと帰り道、「だご、だご」と言いながら帰っていった。途中の溝を「へんこらさ」と声を掛けて飛んだので、それからは「へんこらさ、へんこらさ」と言って帰った。家に着いて嫁に、「へんこらさ」を作れと言うので、嫁は「知らない」という。「実家で食べたのだから知っているはず」と怒って、嫁の打った。するとこぶができた。嫁が「だごのようなこぶができた」と怒ったので思い出し、「だごだった」と言う。

話型は、ものの名前が、途中の行動に従って変わっていくという、「ものの名知らず」が引き起こす笑いであるが、「だご」と「こぶ」によって起こる再発見が効果的な話になっている。「だご」を知らないという愚かしさへの笑いは、その食物がもつ「ハレ」の性質でやわらげられている。

食物をめぐる笑いは、「名しらず」のほかに、食物の独占をいさめると考えられる語りにもある。「他人が見たら蛙になれ」という言葉は、骨董の世界で用いられる慣用語だそうだが、昔話では、牡丹餅が蛙になる話の話型名となっている。

姑が貰った牡丹餅の重箱をしまいこみ、出かけるときに、「嫁がみたら蛙になれ」と言っていく。それを盗み聞いた嫁は牡丹餅を平らげ、代わりに蛙を入れておいた。帰ってきた姑が牡丹餅を食べようとするやと蛙が飛び出し、慌てて、「嫁ではない、姑だ」と言った。

牡丹餅という甘い「ハレ」の食物だからこそ、独占したいという欲望と、それを出し抜く知恵を通じて、独占を諫めているのだろう。それでも、出し抜いた嫁が全部食べてしまうことに、語り手や聞き手は、同時に滅多に食べられないおいしいものを密かに独占する喜びも味わうはずだ。

こっそり独占しようとして、逆に全部を掠め取られてしまうのは、「和尚と小僧」という話型群の典型でもある。和尚は水あめや牡丹餅といっためずらしい、たいていは甘い食べ物を隠して小僧に与えようとはしないが、そのせいで結局、すべて小僧に食べられてしまう。しかも、小僧を罰そうにも罰することができないのである。この話型は小僧の機転にしてやられる和尚を笑うものだが、しばしば食物が二人の緊張関係を外在化させる。姑と嫁の場合と同様、同一世帯の中での上位者と劣位者の緊張関係は、昔話の背景となった社会においては、食物の場に集約されていたのだろう。昔話はその対立を笑いによってやわらげ、食物の独占を諫めながら、独占したときの得られるだろう喜びにも理解を与えているようにみえないだろうか。

4 昔話の中の食べ物

おそらく、誰もが好きなものを好きなだけ食べられるという状況は、限定された地域の限定された時代にしか存在しなかった。昔話が背景としている文化では、食べることは、生活の関心の多くの部分を占めていた。何をどのようにどれだけ食べるかは、個人の問題ではなく、家族全員や共同体全員が共同で考えねばならなかった。飢えずに一年を過ごすためにさまざまな制限があり、食べ過ぎることを諫め、おいしいからこそ食べることが制限される米のような食物があった。そのような状況は、昔話の中にも見ることができ、大食いや食物の独占が諫められ、米の威信が強調される一方、雑穀を食べることを勧める言説が語られた。社会規範であれば、してはならないこととすべきことを語るだろうが、昔話の面白さは、だからこそ、こっそり食べる喜びや、満足するまで食べる楽しみが、後ろめたさを持たせつつ、語られていることではないだろうか。食べることは、生存の必須であるからこそ、快樂でもある。昔話では、食べることが制限されていても、「食べる」ことを体験ができたのだ。

(ここで取り上げた昔話は、すべて『肥後の民話』(日本放送協会出版)と、三原幸久編『阿蘇山麓の口承説話』(関西外国語大学、2003年)に収められているものです。

-
- ¹ 異型として、釈迦の臨終に集まった動物たちの話となるものがある。阿蘇には、こちらの形が見られる。
- ² 異型として、瓢箪から金の粒が出るものがあるが、雀がもたらすものとしては、米粒がより適当だろう。
- ³ 男が助かったのは、菖蒲や蓬の茂みに隠れたからとして、邪気をはらうために菖蒲や蓬を用いることの由来譚を結末にすることがある。阿蘇の類話では、由来譚はあまり見られないが、大歳の日であり、裏白のおかげで助かったので、正月に裏白を飾る、という話がある。
- ⁴ 野本寛一『枳と餅 食の民俗構造を探る』、岩波書店、2005年ほか参照。